

大乘佛教の終局目的

先に人界に十界あり、即ち人類を通じて十界に性格を區別し人間に十界が歴然と有る事を明した。人中の十界の性格を大別に人格を三位に別つ事を得。一、非人格、二、人格、三、靈格とす。亦此三格を人類中の三類聚とも云ふ。一、邪定聚、二、不定聚、三、正定聚。

一、非人格、また邪定聚とは人類中の劣等なると邪惡の類である。之に三種あり。畜生と餓鬼と地獄の性格を非人格とす。畜生は人類中に生を受けても人生向上の行路なるを自覺せず。されども餓鬼格の如くに肉欲我欲の病的にも陥らず。地獄格の如くに邪見逆惡の方にも墮ちず。他動物の本能に近く動物的に生活したる者。餓鬼格は本能的に盲從せず肉慾の病的に墮し、色に荒み、酒に耽り、美を嗜み、美服に憧れ、爲に他物を偷み、又は詐僞して遂に五欲の爲に墮落したる者、又名譽、權利、財産等

の欲望が昂進して、我欲の病的に陥入りたるものが餓鬼格にて、地獄格は邪見逆惡の方のみ發達し、天に逆ひ人に戻り、逆惡無道の性格。斯らの三種は惡の三等に墮すれども皆人格備はらざる類聚の故に非人格と云ふ。

人格の三種（修羅、人間、天上）

人類中全く人格具備したる類中にも亦三位に區別する。内徳缺少して外貌に裝ふ善及び德行を好み、又傲慢勝他の動機より善を爲すものは修羅格と云ふ。人道的人格より道徳に契ふ人は全くの人格なり。常識に富み人格具はり人類の標準と爲るべき人物を人中の人と云ふ。人中の天とは公明正大博愛の君子志士仁人、寔に稀に見るの高等なる最圓滿なる人格、世の爲め人の爲に徳を施し功を與ふ。斯を天的人格と云ふ。斯らの三種は勝劣同じからざれども、人格具備の類聚とす。然れども人格としては完全なるも、進んで靈性的生活に入ることなき爲め、非人格に比較せば實に立派なれども、靈格より見れば精神生活の上に於て永遠の光明を認めず劣聚なる事は免れぬ。

若し靈的光明を得るに至らば進んで靈格に入る事を得。若し惡縁に依れば非人格に墮落するの憂なき能はず。故に不定聚の類とす。

靈格。此に三種あり。一、聲聞。二、緣覺。三、菩薩佛陀。靈格の中に三位あるも通じて靈格たることは個人我を超越して宇宙大靈と合一し靈的生活に入りたることに就て一致す。故に靈格とす。通じて大靈と合一するは同一なれども、大靈中の自己の靈が唯「體」のみ合一して無量の「相」功德と及び「用」大不思議の働きの上に於て三人相同じからず。故に三位となす。

聲聞は真空無我を證し、小我を超えて大自然と合一し、神通自在と無漏の聖智とを以て真空眞如を證得す。然れども己れ獨り涅槃に在りて他の一切を自己の如くに度すことにつとめず。緣覺も小我を超えて真空涅槃に入つて生死を離れたるも、斯二聖は自己のみを度して他の一切を度すことにつとめず。聲聞は他の教示に基づき自ら得道し、緣覺は無師自然に悟達したる聖者である。菩薩と佛陀とは同一の因果の別であ

る。

佛教に大小二乗あり。小乗教には、衆生の五戒を持ち人道を行ふ因には必ず未來に人間界に生を受く。勝妙なる高尚なる理想を以て十善を完ふしたるものは天上樂界に身を受く。四聖諦を以て眞空眞如を證し生死を解脱し涅槃永生に歸着することを得るは聲聞乗である。小乗教には道德上正しき行爲又人格としては實に完全無缺なるものも四聖諦八正道を以て小我を滅し無爲眞如の涅槃を得るにあらざれば、生死を解脱することは出来ぬ。故に終局の目的とする處は生死の苦を脱して涅槃永遠に歸趣するにあり。彼の涅槃は一切の繫縛を離れたる無爲寂靜の處である。其妙境の消息は凡夫妄想分別の心を以て測る事は出来ぬ。聖者自ら證入して實驗する處なり。

大乘佛教の終局目的も六道生死を離れ永恒常樂の涅槃界に歸着する處にあり。大乘教中にも權實三乘一乘等に階級があるけれども、通じて云はゞ無上正覺を成じ永恒常住の大涅槃を得るにあり。正覺とは衆生の心の無明の眠に生死の夢を見つゝあるを

朗然ろうねんとして無明むみやうの睡ねむりより覺さめて本覺ほんがくの光明くわうみやうが圓まどかに照てらして一切さいの眞理しんりとして照見せうけんせざるなきを云ふ。涅槃ねはんとは相待さうたい有無いうむ生死しやうじを超こえて絶對ぜつたいなる宇宙大靈體うちうだいれいたいと合一がふし永恒常住えいかうじやうぢやうの靈界れいかいに安住あんぢゆうするを云ふ。

敎祖釋尊けうそしやくそんが六年勤苦ねんこんくの後のち、摩訶陀まかだの正覺道場しやうがくだうぢやう菩提樹下ぼだいじゆげに於おいて臘月八日の曉しはす朗然あかつきろうねんとして正覺しやうがくを成じやうじ、涅槃常樂ねはんじやうらくを發悟はつごなされた。從來じうらいの生死しやうじの夢醒ゆめさめし妙境界めうきやうがいは正覺しやうがくの旭あすひ東天とうてんに昇のりて、普あまねく天地てんちに照耀せうたうするが如ごとき心靈しんれいの狀態じやうたいである。

釋尊しやくそんが正覺しやうがくの上うへに常樂界じやうらくがいに證入じやうにふして實驗じつけんせる靈相れいさうを說示せつじしたるが即すなはち華嚴經げんぎやうである釋尊しやくそんの本體ほんたいは舍那圓滿しゃなえんまんの如來身にょらいしん、相好光明さうがうくわうみやう普あまねく法界はふかいを照てらして遺のこすことなく、住處ぢゆうしよを蓮華藏世界れんげざうせかいと云ひ、全宇宙ぜんうちうを盡つくして微塵みじん許ばかりも淨淨莊嚴じやうじやうじやうこんふかし不思議ふぎの境界きやうがいにあらざる處ところなし。無量無數むりやうむすうの法身菩薩はふしんはつさつの爲ために微妙みみょうの法はふを說といて化益けやくを施ほどこし給たまふ。如斯かくのごとくの靈妙境れいめうきやう界がいは永遠えいえんに滅めつする事ことなく常住じやうぢやうに法身はふしんの菩薩はつさつを敎化けうけして止やむことなしと。

佛陀ぶつだと菩薩はつさつとは因いんと果くわとの位くらゐにして大菩提心だいぼだいしんを發おこして上菩提かみほだいを求もとめ下衆生しもしゆじやうを化けする

の願を發し、智徳圓滿を期す。一切を度して同一の妙果を得しめんと願を起し、此が實現の爲めに最善の努力をし、志勇猛精進にして忍辱、精進、靜慮、智慧、等の萬善萬行を以て終局に達せんとす。

菩薩が初發心より終局の佛果圓滿に到達する階級に五位あり。十信、十住、十行、十回向、十地とす。十地の願と行と成じて究竟圓滿に體達したるが妙覺即ち正覺を成じたる佛陀である。菩薩が初めより佛果に至る階級を月の盈缺に喩ふれば、凡夫が人生に永遠の光明を毫も認めぬ人は晦月の様にて、初めて如來の靈光に感觸し一分自覺を得たるは新月にして、漸々に月が増進して竟に圓滿なる滿月となるは即ち菩薩の滿位に達し、智徳圓滿なる佛位に到りし姿である。菩薩は即ち佛子である。亦法王子とも云ふ。頓て佛と成るべき階級である。

大乘佛敎の敎ふる處によれば、十法界の中に於て三惡道と三善道との六道法界は靈性未だ開けず。宇宙の大法に順するを知らず。生死に流轉して止むことなし。故に迷

妄まうの凡夫はんぶと云ふ。聲聞しやうもんと縁覺えんかくとは生死しやうじを脱だつすれども、未だ圓滿いまだまんまんなる終局しうきよく永遠生命えいゑんせいめい大自由だいじゆうの位くらゐに到いたらず。故ゆゑに十界じうかいの中唯菩薩うちたくはつさつのみ大法だいほふに則のつとり、靈性れいせい開發かいはつして光明くわうみやうの生活せいくわつに入り、現在げんざいを通じて永遠えいゑんの生命せいめいに入り、自ら人生みづかじんせいの眞理しんりを自覺じかくし、而しかして亦他人またたにんにも覺かくせしめ、自覺じかくして光明くわうみやうの生活せいくわつに入るが故ゆゑに其行爲そのかうゐも又向上またかうじやう的に佛果圓滿ぶつぐわんまんを期きして此これに向むかつて進趣しんしゆす。

經きやうに「一切衆生いっしゆじやう本法身ほんほつしんより生しやうじて法身ほつしんに還かへらざるなし」と

大乘佛敎だいじやうぶつけうに敎をふる處ところの人生じんせいの終局目的しゆきよくもくてきは正覺しやうかくを成じやうじ涅槃ねはんを得うるにあり。正覺しやうかくとは自己じこの靈性れいせいを開ひらきて眞實しんじつに自己じこを覺了かくれうしたること、即ち心すなはの闇こゝろはれて本覺ほんかくの日輪にちりんが現あられ出いづること、心靈しんれいの日光にっこうで普あまねく萬法ばんほふを照てらして誤あやまなし。

又他の凡てに自性すべを開ひらかしめ眞理しんりに契かなふ生活せいくわつを遂とげしめ自他共じたともに光明くわうみやう的行爲ぎやうゐを以もつて向かう上じやうせしむ。

涅槃ねはんとは凡夫はんぶの生死しやうじを超こえて永遠えいゑんの生命せいめいに入りたること。故ゆゑに釋尊しやくそんの聖徒せいとらが釋尊しやくそん

の指導により修行卒業の曉には有餘涅槃に入る。有餘涅槃とは有餘依は此精神が依止する形態を云ふ。假令身體は此儘なれども心靈は生死を離れて絶對永恒の大靈と合一し永遠不滅の生命となり常住安樂の狀態と爲る。然れども肉體のあらん限りは精神は無爲安穩の極樂にあり乍らも肉體は生活のつとめ、又寒熱飢餓の苦は免れず。其れを有餘涅槃と云ふ。言ひ換ふれば肉體の儘ながら神は極樂に安住するの謂である。

彌肉體の生命劣等の肉體の殻を脱して心靈が極樂に本に歸し常住と安樂と自由と清淨との法性常樂の身となる。之を無餘涅槃と爲す。

正覺涅槃

正覺涅槃とは自己を本としての悟道的哲學的の語で、宗教的に云はば無量光無量壽の中に救済せられたることである。正覺と云ふは人の靈性開發して廓然と大悟の目醒である。目醒めて見れば大日光は六合を照して萬境現前す。

靈性目醒めて見れば本覺の無量光の日光は心靈法界を照して一切の眞理は了々と現前す。譬へば日光と人の眼目との關係に依て天地を明に見るなれども、自己の眼目の方を本として正覺となすは聖道家である。太陽の光明を本として光明獲得と云ふは宗教家である。又自己が小生命の生死を脱して永恒の大生命に入るを涅槃と爲るが聖道家で、生死の凡夫が如來無量壽國に歸入して佛と共に無量壽と爲ると云ふは宗教的である。

此の如く大乘佛教の宗教的方面は人生の歸着する處は吾人が現在の自己は無明心の

闇に人生の歸着も自覺するを得られぬ凡夫である。依つて例へば太陽なくば世を見ること能はざるものゝ如く吾人は心靈界の太陽無量光如來の光明を仰ぐにあらざれば眞理に適ふ生活は出來ぬ凡夫である。依つて一に靈的日光の明ることを求む即ち信仰である。

信仰に依つて光明獲得し光明生活に入る。從來の生死の凡夫も全く如來無量壽の中に歸命する時は一滴の水も大海に入て一味に歸する如く我が此生命が此まゝ永恒常住の無量壽と歸一したのである。

無量光の中に入るを我らの光明と云ひ無量壽と歸一したる生命が即ち生活である之を光明生活と爲す。然らば即ち吾人の心光は無量光中の一分に吾らの生命は無量壽と合一す。此無限の源より此身に靈德を實現的に行爲するが即ち人生の歸趣である。

已上は通じて大乘教に由つて一應の理を説話致したり。是よりは光明生活に入る實地宗教的方面より話せんと欲す。

光明生活に入る心

大乘佛教の人生を指導する趣旨は正覺と涅槃を得せしむるにあり。之を宗教的に云はゞ光明靈的の光明を獲得し永遠の生命を信じて光明中の生活に入るにあり。此の大靈の光明中に歸入すれば永遠不滅の生命となる。之の心靈界の太陽を無量光と云ひ其安住する處を無量壽國となす。故に宗教生活に入るには先づ心靈界の太陽なる如來の光明の實在と實力とを信ぜざるべからず。無量光如來は精神界の太陽である太陽のエネルギーに光熱化の三線ある如く、如來の光明に三能あり。智慧と慈悲と靈化との三徳あり。智慧は心を照す光線である。太陽の光線にて世界のものが明に見ゆるが如く、智慧は心の世界の眞理が見ゆる。慈悲は太陽の熱線にて萬物を溫る如く如來の慈悲は人の感情を溫めて苦を抜き樂を與へて有難き樂しき生活として下さる。

靈化は太陽の化學線が地球の生物化合して生物を活かす如くに、如來は人の意志を靈化して善良なる人として聖意に叶ふ働きを作さして下さる。

如來が十方の心靈を照して攝取同化し給ふ靈力を如來本願力と云ふ。本願力とは一切衆生の子等を御親の恩寵の光を以て闇と惱と惡との心を悟と樂と善とに同化し如來なる親の子となさる聖意を云ふ。

經に彼佛光明無量、照十方國、無所障礙、是故號爲阿彌陀。又た彼佛光明遍照二十方世界、念佛衆生攝取不捨。又た是故無量壽佛號爲無量光佛、乃至超日月光佛。其有三衆生遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。

如來の大靈光は常恒不斷に照して衆生の上に及ばし給ふ事を信ず。此如來の光明と合一融合靈化する人の心意を三心とす。三心にして始めて如來の心光と合す。

經に十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。

此の金文は如來が迷没の衆生を濟度せんが爲に法藏比丘の身を現じ、四十八願を建て

無明罪惡の衆生を如來と同じ光明の中に安立せしむる道を立てたる第十八願の意にて、意は如來の心光は衆生の爲に照しあれば衆生の心に至誠心を以て我を信じ我を愛し我國を欲望せよとの願意である。

智慧——信

慈悲——愛

聖意——欲

宗教的關係の神人合一、三密融合等、又光明同化等の語を以て心理狀態を述る。

如來大慈悲と衆生の靈的生命

如來は大慈悲者である。衆生を一に愛する慈悲の親である。親は無上の愛を以て衆生を寵愛し給ふ。故に吾等も凡てに超えて如來を愛樂するにあり。大我なる如來と小我なる衆生との相愛親和に親密なる因縁によりて衆生が聖き生命聖き子と生るゝので

ある。

如來の慈悲は宇宙本體から愛の表現として慈愛深き溫容を以て現はれたるが大慈悲心である。如來慈悲の相好は慈悲心の現れである。其相好が即ち大慈悲心である。我等が如來を深く愛慕する心に現はれたる溫容が即ち子を愛する慈父である。我等がまた眞實に如來を愛する眞情あれば必ず慈悲の面影を憶念せざるを得ない。眞實に愛して玉顔を憶念する時は面影を見ざるを得ぬ。眞實に如來を愛する吾心を客體に表現したのであるが、如來我心となりて我如來を（二字不明）かは解らぬ。

如來の慈愛に觸るゝ時は慈愛に充され自己が即ち愛化し而して自己の圓滿なる調和を得。總ての賤劣なる物を愛せず如來を愛慕し融合美化したる情を以て見れば總ての人に對して相互の間に融和す。

如來は大慈悲心者である。經に佛心者大慈悲是也と。如來の生命は大慈愛である。例へば太陽は地上の萬物に對して愛を注いで居る。太陽の愛に依つてすべては活ける

如く衆生の心靈は如來の大慈悲愛により靈的生命が活きる。

我等の心靈は大なる慈愛に生きる。愛とは我らは如來大慈愛に依て活くる故に我等靈の生命も即ち愛である。若し人愛なくば生命なきなり。太陽の熱の如く如來は暖温なる慈悲を以て一切心靈を温暖なる靈生命として活す。我等が肉體の生活する間は身温あるが如く、我らの靈の生命に愛てふ靈的溫度備はれり。

タゴール曰く、本來人間は自分の奴隷でもなく亦宇宙の奴隷でもない。人間は唯愛に生きて居る。人間の自由完全は愛其ものの中にあると。又人間生活の目的を遂げる人々とは、人と自然との融合を得て、神と共に合一し、そこに安心立命を得ることの出来る人々を云ふのである。

天國は我物でない、我を離れたる衆生共有の調和なる心靈世界。

愛。我如來を愛す。如來は何處に在す。如來在さざる處なく如來は絶對無限である。

我々は如來の愛子である。吾らの靈性は如來の中に投歸没入して、亡して仕舞ふので

はない。我ら個人の靈性を通じて如來を見る時、絶對無限の如來を知見することが出来る。絶對なる如來は一個の靈性の中に溶け入らんとしてをる。

如來を愛するものは無限。如來我にあり、如來我に示現して來るが故に我心は如來と融合す。如來の慈愛は最も溫かに最も安かなるが故に、如來と融合した吾心は實に安かにして且つ樂し、即ち法悦に充滿せらる。吾人の喜びは吾人の心中に存する如來の賜物である。

靈的生活の糧

生命の有る宗教意識即ち靈の活氣ある信仰を生活するを靈的生活と爲す。世には宗教を唯言語文字の教權を以て眞の宗教と謂ふあり。それは眞實の生命ある信仰に入るべき方便とは成るべけれども、それを以て知識を以て即ち了解を以て生命ある宗教と云ふものではない。

活ける信仰即ち靈的生活の心理狀態を説明せんと思ふに、靈的生活もまた肉の生活と其形式に於て相比例すべき點あり。肉の生活には必ず二の職分がある。一は榮養、即ち自己を保存するに就て缺くことのならぬ食物である。二には生殖で自己の種族を存續するには必要なる男女夫婦間の交渉である。此の二の職分は凡ての生物に至りて共通して生活に伴ふものである。肉の生活の内、榮養を攝取するは動物にも植物にも各自己を養ふに適當せる養分を取つて之を食し之を消化して自己の生理機能を保存し人の生命を保存するのである。

靈の生活にも之に比ぶべく或る靈的養分を以て心靈を養ふのである。此靈的要素は本より法界に周徧せる靈力にて、之を本願力とも、また衆生攝取の一大靈力とも、又靈的光明とも名づけ、彌陀身心徧法界映現衆生心想中と云ふ。此靈力の存在することは宗教的實地に實驗に於て明かである。

靈の糧の目的

靈の榮養を法悦と曰ひまた法喜とも曰ふ。靈の生殖に比すべき作用を三昧と云ふ。是に附ける妙味を禪悦又三昧樂と云ふ。靈的生活には法喜の食と神人交感の三昧樂とは缺くべからざる職分である。若しまだ此の二職の全からざる宗教意識は唯宗教の知識の分に止まりて未だ眞實靈的生命ある宗教意識にあらざるを云ふのである。

禪三昧爲食また禪悦爲食と云ふなれども、食に比するものまた生殖に例するも何れも比例するまでである。然れども此二職分が靈的生命を保存し傳播するの原動力となることは事實である。

靈の糧となる法悦は愛樂佛法味とす。此養素は法界周徧の靈力また靈光にて人の信仰心を以て之を味ふべきのである。此靈的要素の存在は眞實靈的生命のある心靈の常に味ふ處、靈の糧とも云ふべき要素も肉體の榮養と同じく胎兒も母胎にありて養分を

受けて長養せらる。生後赤子は自ら消化すべき榮養機能が未だ發達せざる間は母が消化せられたる小兒の消化に耐ふる乳汁として小兒に哺ましむ。小兒は之に由りて養はるる間は其糧となる乳の味に於て、生理衝動の自然に乳を慾求するものにて未だ其味の如何は意識することはなからう。身體の成長するに隨つて生理機能も心理作用も成熟し、其食の味の甘苦も判然と自から意識することが出來得る如くに、靈の糧に於てもまた然りである。初心の信仰心には佛法味即ち法悅の味ひは未だ味ふことはない。初め母の消化せる乳に養はるるやうに、師友知識の自己の味ふ處の妙味を分つに之に養はるるは小兒の乳に於けると同じく、靈性稍々發達して信心開發し靈的生活に至つて初めて靈的甘露の妙味を實感することが出来る。心靈を養ふべき法喜とは靈的氣分にて心氣快然として皓廓駘蕩として熙怡極りなく心廣く體肝かに、食物でも眼に其色を見鼻に其香を嗅ぎ舌に味ふ如くに、靈の養分も靈的覺に靈我至美の妙感を感じらるる。靈性益々發達するに隨て法悅の妙味もまた彌々深重なるに至らん。靈の養分は

天地に充滿すれどもそれを攝取すべき享受すべき靈的機能が成熟せざるほどは自ら直接に其れを味ふことは出来ぬ。靈を養ふ甘露即ち聖人の糧なるアミリタは無量永恒の生命を養ふの糧である。

作佛度生

食物の目的は即ち榮養、身體組織の全部が消耗するを以て之を補充して活力生命を保存するのである。而すると夫は甘味と曰ふ快感を附隨して其食欲を起さして自ら好んで食物を取るようになる。若し甘く感すべき作用がなかつたならば食物を取ることに屢々怠る。然る時は遂に榮養不足して活力保存の目的を失ふに至る。そこで一切とが屢々怠る。生物界の大親なる法身は自然生理の欲求として生命保存の目的の如何に關せず唯味を貪ばる爲にも食事を怠らぬことになる。世には活力目的を顧みず耽酒嗜味遂に衛生を害することを知らざる者さへあるに至る。それ等は手段と目的とを顛倒したる結果

と云ふべきである。

靈的生活の榮養なる靈の糧に於てもまた然りである常に信念を以て靈を養ふに如來の心光また恩寵また一大靈力を要するのである。衆生の信念に之を享受し感應する營養機能である。

人の信念の中に如來の靈光常に加はり感應して之を感じて靈は活力となるのである。如來の靈力もとより無限なるも衆生の信念の程度低ければ靈感の度も随つて淺し信念彌進む時は靈感の力また深し。喩へば火は大小なけれども燃料の大小に隨て火勢に同じからざる如し。

靈的養分の如來の靈力は之に依て靈的生活をなさしむ。其目的は靈的生命として生活活動するにある。如來の靈に由て養はるる心體の活動の如來の使命を果すべき行為となる。如來恩寵を感じ靈的生活をするに個人としても團體としても階級あり。個人としては信仰幼稚の間はまだ個人靈的生活の資格なし。佗の師友知識の教諭に由り

て信仰の生命相續するは恰も小兒が母の養ひに由る如し。信念進むに隨つて一個體の生活となるは即ち信心開發し、靈的生命となる是精神更生して後の生活なり。已に個體の生活を作るに至つては現に彌陀の子としまた彌陀の一子として靈的行爲をなすに至り、已にここに至りて生活の目的は彌々明瞭に、靈の糧に由て養はれたる靈の生活は願作佛心と願度衆生心との心とし、自己の靈は益々進みて上は佛位に向つて上り、下は衆生に向つて他人を自己の心靈と同じきに誘導す。此自己の向上を願作佛心とし他人を勸めて靈の生活に誘引するを度生心と云ふ。

一切自己向上の萬善萬行は、皆如來の靈力に養はるるに由つて行ふことを得るなり。又自己に得たる靈を他人に頒つのみならず、自己が彌陀の聖旨を以て自己の意志とし、如來の一切衆生を攝取し至善の靈界に向はしめたまふを目的とするを又自己の目的とす。

生活々勤が靈的生命の目的にて、それには靈の糧なくてはならぬ。如來の恩寵信念

に加はり來る即ち靈を養ふ糧である。

法悦の妙味

已に靈を養ふは、生命保存の目的靈的生活の爲なれども感情に恩寵の加はる處に不可思議の妙味の感ずるあり。得も云はれぬ歡喜悅樂を感ず。そは天地に充ち溢るる計りなる大愛の感愛は徐ろに流れて、長閑なる春の日の爛漫たる櫻花咲き匂ふ園生に遊戯するにも優れて、無愉快樂のほど、是ぞ法悦の靈境なり。

從來の人間界の感情を蕩除し滌洒して、一度如來大悲の靈界即ち涅槃常樂の都に神を轉入する時は、天も開け地も開け清々しく乾坤は顯はれにけらし。其靈界に逍遙する心象は實にえも云ふ可からず。

肉體の榮養は蛋白澱粉脂肪纖維の養成分を要すると比すべき、心靈の感覺と感情と知力と意志とに對する清淨と歡喜と智慧と不斷とは是心靈を養ふ要素である。

聖典を讀誦し諷誦し、若くは清晨に頭腦も清々しき時に朗らかに神を聖經の文に誘引せられて清き樂園に逍遙し、七重寶樹の林には八風に天樂を奏し、八功德池の波は徐に動きて微瀾をたて天空に響き、庭に曼陀の華を雨す等の言に、我を忘れて思を淨土に遊すなど、自ら靈を養ふの糧となる。或は如來の靈德を讚美するの聲は樂に和して光明を稱へ、念を讚稱に導かれて蒼天を凌ぐの尊容を想ひ、我想念に浮ぶの相好に如來の慈悲の圓滿なるを表せり。是亦信念を養ふの料ならざるはない。

或は念佛三昧の窓には阿彌陀佛と心を西にうつせみ(空蟬)の如く脱出でて生佛一如の妙境に入る。又は冥想觀念の床には神を日想に凝らし、或は佛の相好を觀じ、または如來の大慈悲を想ふ等。また常に大悲の懷に安住するの憶等は皆靈を養ふの糧と善導大師は定め給へり。

斯様に種々の靈を養ふ糧はあれども行住坐臥に常に如來と離ざるは名體不離の稱名最も親し、口稱の三昧はまたいよいよ熟するに随つて益々其妙味の極りなきを感ず。

故に佛法の美味を味ふの妙處に至らざれば未だ佛法の妙を語るに足らじ。吾同胞衆よ
吾は自ら此妙味の極りなきを覺えて之を味はずには居られぬ。又自ら味ふ如く吾同胞
衆に之を頌ち申さずに居られやうか。

靈の衣

如來の賜なる靈の衣は靈格を莊嚴し靈生活に必要缺くべからざるものなり。

人の生活に身に纏ふべき衣服がなくては應はぬ如く宗教の心靈にも是と比較すべき
其の心靈の生活を助くべき衣服なくてはならぬ。或は解脫衣又は福田衣又は應法妙服
或は慚愧衣又は柔和忍辱の衣等の法を以て心靈を覆ひ莊嚴すべきを表はしたる衣の名
詞多し。

佛徒の袈裟を身に着くるは、彼の裸體外道の如きはいかに見苦しき姿は慚愧すべき

であり。是は一體心に慚づる事なき故に姿もその表である。佛徒は應法に應はぬことは慚すべきである如くに身も應法の衣を着る、之を慚愧衣と名づくるのである。

吾人が四大の假和合なる此の身體を身分にも應せぬ位飾りて還つて己が心の卑俗たるをも表はして慚ぢぬものもある又は綾羅を身に纏ひ珠玉屑を飾りたるも心靈には靈格を莊嚴すべき應法の衣を求めず。其の精神の上には人格莊嚴の備りなくて實に其内面生活なる精神には法の身に纏へるなくして憐むべきものあり。身の虚飾の爲には金錢を塵埃の如くに投すれども慈悲同情の爲には一掬の涙もなく慈情より洩出する一厘半錢も吝む者あり。

自ら廉恥の心なくまた自己の分限を知らざる如きは自己の人格を莊る衣なきものなり。

然るに吾人自ら視れば從來の精神の生活の狀態はいかんど。己が美服を誇り他人の勝れたるをば羨み嫉み、否服装のみではない一切の人格を莊嚴する道德情操なく、自ら人を畏伏する威嚴と暖かなる慈悲の力を以て人を覆ふと云ふやうな事とて言にこそ

言ふべけれ、精神的にとてもく完備して居らず。能く自己を反照して見れば己ながらもあきれる計りなる我であるけれども己が非なること汚なることが自覺できぬ。己が心の染穢とは決して思はぬから慚らいはせぬ。

今にして思へば何故に我は自己の染汚をさまで苦にもせぬのでありしか。己は罪の深きもの己は汚れた者なるぞ。

汚れたる衣

世に未だ宗教心なく自己返照の光なく只肉の慾を求め肉の奴隷名利の従僕となりて利己主義の漢は己が意は貪瞋邪偽奸詐百端實に忌むべき思想のみが其胸裡に往來し穢はしき情と意なれども、自ら口を開けば他を謗り自ら誇り我は罪を造りし覺えなしと言ふ、されば慚愧の要なければ懺改むべき程もないと謂ふ人あるは何故ぞ。彼は穢はしさにみたされながら自ら自己の汚を知らざるは外でない。喩へば泥よりも尙穢なき衣を着る人はたとへ泥の衣を着るとも敢て穢なきを感せず、其は自己の衣の穢きが故

に外より受けたる穢さを感じざる如くに、生得我痴我慢ばかり蔓延り、其の性情に穢さが其の本體となつて、其の汚が我が主人と爲つて、内にまだ靈性は伏して少しも發萌せず。外に靈の光に接觸したる事なき故に身と口と意とに於て善からぬ業を爲せども自ら其の非なるを自覺せず、穢なきを感じざるのである。其の人は内心は穢を以て我と爲してそれに思想と言語とに於て己を穢すをも穢れてあるを覺えざるのである。外は教の光明に照され内は靈性が發育して良心の顯動してこそ初めて己が三業の所作が己を汚すことを識り、情に於ては非を悔ひいかにして我は清きに己を滌がんものとと思ふのである。思想の高き人より照しめれば忌はしき身にありながら自ら汚れることを識らざる人は穢の衣を自ら諒として己を汚すの言語行爲を苦にせぬのである。私共は生得穢の衣を我に着て泥よりも穢なき衣なれば泥つきたるを苦にせざりしが己を清めて己に靈の清き衣を心に着くることを得たるは何に幸ぞ。

淨められたる我は淨き衣

我は生れながら汚れたりき。自ら汚れを識らざりき。されば忌はしく感ぜざりき。
また心に清き衣なきを恥ぢざりき。

彌陀心水沐身頂、觀音勢至與衣被、我は彌陀の心水に頂を沐られて初めて會つて生れながら衣たる心の衣の汚さまた日々に汚し來りし心の衣のいかに穢らはしきを忌み厭うて如來の心水に滌がれて無始の汚れの忽ちに清き我となされ觀音勢至に衣を與へて被せしめられる己となりしことを悦ぶ。靈水に沐した靈我のいかに皎潔なるぞ。ミ
オヤは此靈に應せる衣を以て我に與へ給へり。我は淨衣を被りてぞ感ず。靈に被る衣は清淨無垢なり純潔なり一點の汚なきなり。

昔泥より穢き衣には殊更に汚れは感ぜざりき。今は純潔無垢の光の衣を着る。己が肉の爲に之を汚すことの實に忌はしきを深く感ず。純白無垢の衣を被る人は之を汚すことを憂ふ。若し之を汚すことあらば忽ちに滌がんことをおもふ。我等は如來より聖衣を以て靈に被むれり。願くは世の五塵六欲の爲に垢つかざらんことを欣ふ。然れども靈我の舊主肉の我は舊習性によつて動もすれば昔の穢き衣の中に身を包まれんと欣

ふ。

五塵即ち綾羅の美服。蛾眉の粉黛の好きは己が靈格を汚すの色とも覺らず、姪聲に想を耽るは清き衣を染す塵とは感ぜざりき。アルコール中毒の己を毒する物を還て口腹にまたなき耽嗜味の物と覺ゆ。傷しきに觸るればまた衣を傷くることを自覺せざりき弱き我らかくばかりに淨衣着あるを覺らず。靈の衣染むを覺へず。また眞實に之を滌ぎ淨めて玉はらんことを欲求せざるは自己ながらも無慚なるを知る。

垢染の衣は衛生に害あり。

吾人が眼に色を視耳に聲を聴き舌に味ひ身に觸れたること等の如き、すべて外の刺激心意に感ずれば、それが尙後にも屢々内心に往復して心に纏ふものは即ち心の衣である。然るに我ら法王の子として恥しからぬ心光の衣を着つゝある己なるを顧みて自己を返照して現に今我が靈に纏ふものは何ぞと、自ら顧みて疾しからぬ純潔無垢の精神を以て決活に光明中の活動内に在り。外に出で如來と共に在る身の、心に纏綿するもの何ぞと反省して、我が法王の子たりとの内心鼓舞の己れこそ純潔無垢の衣を

着たる己なれ。

淺ましき凡夫の憐れさは視し色聽きし聲に纏はれて心に被る衣物の益々汚穢の深くなるを覺らす。是心靈生活の衛生に害の甚だしきを感じざるは情ない。昔ウバキツタ尊者に弟子あり。自ら學識と智解を估みて深く悟達の奥に進まず。常に言ふ、我が學解已に達せり師なんぞ我に祖位を禪らざると。或る時師に隨行して路に就く途中に一の妙齡の女子皓白の臍を露はして洗濯するあり。弟子僧、その白き臍を凝視しに暖血湧き情動きたりき。頓て尊者其の僧に告げて曰く、汝が白き臍に動かす情其の心情の如きそれでも祖位の資格あり哉と。其の僧大に慚ぢて答ること能はざりしと。

凡夫の心に常に纏ふものは六塵の影を追ふて去らず。全く己に實力なくも名譽の望求は纏綿として滌ぎがたく或は實術婆迦が面に刻める王女の玉顔は洗はんとするも滌ぎ難く遂に彼は戀の火に燒かれて死せりと。

凡夫の心情に纏り易く脱し難きは闇路に迷ふ戀衣。是が爲に有爲なる青年を墮落の淵に沈ましむるは是より甚だしきは無し。また耽酒嗜味の凡夫心に薰染して此に深く

染み著きたる後には中々に其の習性はとても脱ぎ難きものである。色情と耽酒とは最も凡夫の心に染みて甚しき染汚となるものである。靈的生活の純潔無垢の心衣を以て靈的生活の爲に害となるものは概して五塵六欲の纏ふ處に甚しいのである。深き靈的生活を望むものは斯の如き惡習に染まざるを要す。是垢汚たる衣の衛生に害あると同じく惡習に汚染するは靈的生活の害となる。

解 脫 衣

佛徒が衣を被る時に大哉解脫服、無相福田衣、被者加戒行、廣度諸衆生との偈文を唱ふ。此の解脫服は實に精神に着て是が表記として身に纏ふ衣にまで及ぼすものである。

我は大御親の光より此の解脫の衣を心靈に着せて戴くのである。解脫の衣とは何である。解は解く脱は脱ぐ。我ら凡夫が天性稟賦として生得の煩惱、共通的の煩惱とまた人々特殊的に持て生れた人々の氣質とそれから生後に染み込んだ惡習慣とが我

に染みこみ、我が心の衣として纏ふて居る。強く纏ふて中々解けぬ。此の惡性惡癖の纏ふ着物は脱ぎがたい。是を解き脱ぎて清潔無垢の無相福田衣にして戴くのである。煩惱にも貪欲瞋恚愚痴を始めとして嫉妬憍慢恨害等の種々の弱點が凡夫の心には生れながら纏ふて離れず。

煩惱にも人に依りて厚薄はあれども心に煩惱の服を身に纏ふて居らぬ人はない。氣質にも或は體質のいかんによりまたは遺傳にもよる。剛情なるあり苦勞性あり無貪著なるあり執著強きあり何れも生れつきの氣質といふ衣は脱ぎ難いものである。そは靈性本心の上に汚す氣質の服であるからこゝにほゞきて脱げば脱げないことはないのである。

生れて後に其の周圍の事情に染みついた惡習も中々脱けがたいがそれらを身に纏ふて居てはとても法王の子といふべき靈格の生活はできぬ。

法華經の長者窮子の喩の如くに、吾人靈性の本源は如來より出づるも、淺ましき動物の染汚たる習慣が性となりて生れし身の悲しさ、いかに長者の子にして一度迷子と

成り乞食の群に入りて久しく生活すれば、矢張り乞食の子である。垢衣を身に纏ひ羸劣穢臭目もあてられぬ汚れである。けれども此の乞子が長者の許に歸りて垢汗を滌ぎて長者の子相當の服を身に纏はしむるには先づ汚れたる衣を解き脱がせねばならぬ。我等も汚れたる我に纏へる心の衣の煩惱や氣質では法王の子たる靈の生活に入ることは出来ぬ。いかにして解脱を得られやう。自己の力では解けぬ脱げぬ。

佛とは誰が結びたる白糸のくりかへしみよ賤のおだまき。吾々の性情に結びつきたる煩惱の衣は何の紐を以て何に結びつけてあるかは自らわからぬ。けれども煩惱の己に纏ふて居ることは確かである。慾も瞋も嫉忌も恨戾も持つて居る。また己が持ち前の氣質も種々の色合の模様の着物をきて居る。其の氣質として見苦しい程虛榮心の衣の氣質もあれば恐い荆のような觸るも危険なる氣風の服を纏ふてあるもの等實に千差萬別の氣風の服を人は纏ふて居る。人々各々自負自誇して居るもの、實には眞に人格を莊嚴する服ではなくて實は靈を覆ふ處の染汚物である。人は是らの染れ汚れを脱ぎて靈の服を以て靈格を莊嚴すべきである。

其の煩惱も生れつきの氣質の脱ぎ難きことは能く人が言ふではないか。どうも私は是が生れつきの性分で據ない。また是が凡夫の持ち前でとても脱ぎがたい。成程其の解き難い脱ぎ難いのは尤である。けれども全くそれは良くないと云ふことも自ら信じて居るであらう。此の氣質此の持ち前が悪いと自覺したならば自分の力で脱ぐ事が能はぬとも是を脱いで垢のない純潔無垢の衣を心に着た方が愉快であらう。此の爲にこそ解脱の要と能とがある。

大御親は私共の生れつき一旦聖旨に背きて汚の衣に心を染めて靈格を失ひ靈の生活が能はぬを憐み、子を愛しむ親心、私共の爲に見るも忌はしき汚の衣を脱ぎて清き衣を心に着せしむるが恩寵の本願ではないか。

若し私共の天性汚の衣が無きものの本來純潔無垢な物ならば解脱の要はない。大ミヤの智慧の光も要らぬもの。佛は何の爲ぞ。之は本來私共の心は是非とも解脱させねばならぬ必要よりこそミオヤの本願の光明もあるなれ解脱の法も要るなれ。

又是と共に私共には本々純潔無垢の衣を與へて聖き靈となり。靈の着物で生活でき

る性あればこそ、ミオヤの本願も能ありて尊く辱けないのである。

いかにして脱ぐことができやう。

植物の栗でさへ果が圓熟すればトゲの毛衣を脱ぎすて、人に珍重せらるゝ果實となる。吾人も如來の光明に依て靈が圓熟すれば煩惱惡質の衣から脱れて靈の清き衣を被て清き生活の人となる。

日光に乾されたる澁柿果は珍重せらるゝ甘味と化す。吾人如來の心光に浴するときこそ煩惱と氣質と惡習の着物を解脱して清き衣を被て清潔なる生活をなすに至る。それが解脱の衣である。

解脱衣をすれば自由となる。氣質の爲に纏はれず。煩惱の爲にも絆されず、自由の天地にすみて靈の生活を得る。

人に嫌はるる毛虫も時來れば毛衣を脱ぎ捨て、綾羅綿繡も及ばざる羽衣と變つて神通自在の蝶となり衆人の爲に珍重せらる。

我等も如來の光明によりて煩惱の毛衣を脱け出で、自由意志の人となりて此の世

から聖衆の數に入るべきである。

應法妙服自然在身

本願の文に、佛の所讃の如く應法の妙服自然に身に在らむ。若し裁縫擣染洗濯することあらば正覺を取らじこ。

ミオヤは我等に應の妙服を身に着けしむと。現世に於て吾人は此の應法の服を着て靈の生活をさせて下さるのである。現に吾人は着て居るのである。裁縫洗濯もなくして靈に與へられし衣である。

應法妙服とは眞理に應ふ衣である。古人も言るあり若し先王の法服に非ざれば敢て服せずと。外形に於て已に然り。況んや其の本源なる心靈に於てミオヤの光明に生活せる者應法の妙服を被ずして清き生活が起きやうか。我等は心が常に如來と共に在り行往坐臥に於て離れぬのである。其の心に於て如來の與ふる光明の衣を放ちて裸體で居られうか。一度靈に被られたる靈の衣は脱ぐことはできぬ。脱いで脱がるゝも

のは煩惱や氣質の肉に就いての迷ひの衣である。眞理の光を以て心に得たる上は之を脱ぐことは能きぬ。是が禪に所謂自性天眞の解脫衣である。裁縫も洗濯も要らぬ眞理の衣である。

けれども此の無垢清淨の心を本として其れが衣の地である。またその上に種々の模様恰好がある。應法ならなくてはならぬ。吾人が世に處するに常識なくてはならぬ。應法は法に應ふ心を衣として世の人々に對すべきである。

常識を缺きて偏屈邪癖なる心を以て他人の迷惑をも顧ぬ如きは心に應法の服をかけぬからである。

應法は眞理に應ふ常識を以て身を莊嚴することまた道德を以て己を具ふことである。

己が分限を辨じ恭儉にして己を守り、正義簾潔正直至誠は衣の地を堅完ならしむる物、慈愛同情公平無私の同事利行愛語布施の如きは色合模様の最とも美なる物である。應法は先王の法服に非れば敢て服せずの義にて常識乏しき時には世に處し公衆に待

するの應法が明でない。常識は矢張應法の智識にて百般の事に渡りて宜しき應しき程度を誤らす分を超へず。

そこで吾人ミオヤの光明を被つゝ在る生活には己を持し他に待するの心意、法王子としてあるべきように在り爲すべきように爲したりせん。突飛な行爲偏頗なる意向は應法の服を着たる心にあらず。宗教家とし教育家政治家とし農家とし各々其の分に應じ天職を完うし。己が心に具備すべきを具へ整ふべきを整へ、たとへ形骸の服裝嚴具に於て缺乏することあるも、精神に人格を全ふする被服裝嚴は完全なるを要す。而して始めて應法服をきたるものとす。

従來の佛教信者の中には偏癡固陋なるありて、私共此の世で學ぶべきことを學ばずとも識るべきことを識らぬとも、死して極樂に往けば自然に一切智を得らる。今は苦んで習ふに及ばすなご謂ふものもある。成程學ばすこともよき事もあらう。然れども學んで己を完からしむる事までも學ばざるが還てよき物のように意得たる頑迷なるものあらば凭る族は應法不應法は議するに足らずである。

活用の出來ぬ學問又驕慢心を助くる智識の如きは寧ろ避くるに如かず。なれども如來の光明に生活する身の處世に適當したる常識を缺きては應法の服を着たる生活は不可能である。

なれども全く至誠心に直質丹心の信仰より如來の光明を得たる精神生活には自から完全に常識を具へたる人と同じく常識に應ふ處世ができる。

如來の心光を被りたる人は己を持し他に對し應法ならむことを期せんには常に深く思ひ熟々計りて心自ら端正にして辱精に道を行ひ世事を決斷せよと云ふ。

孔子が一以て之を貫く忠恕之のみと。

如來の心光と云ふも忠に恕る處に良心の聲として啓示さるゝが即ち光の衣被たる人の生活または行爲と現るゝなり。

懺悔の衣を被よ

光明に浴したる身、光明を被むる身は常に純潔無垢の衣を以て心靈に着ける自

己清淨無垢にして始めて外の穢垢を認識することができる。そは如來の清き衣着たればなり。清き衣を覆ふ身にして思想にも行爲にも汚點の起るあらば自ら省みて良心は忽ちに血潮となりて自ら慚愧に耐へずして苦悶おくこと能はざるに至る。

己れ穢すまじき靈を穢し爲すまじきをなし言ふまじきを言ひ弱き己を呵責し躓きたる我を悔ひ更に再びなさんことを希望するは慚愧の衣被ざればなり。若し心に慚愧の衣着ざらんか、己が非を飾り惡を裝ひ遂に靈をして自ら墮落の泥に溺れしむるのである。

如來の光明に遇ふて始めて慚愧を感ず。若し意にして闇黒にをらんか己が非惡も認むる能はず。然らばいかにして慚愧の情や發らん。遺教經に慚は鐵鉤の如く能く人の非法を制す。また慚愧の服は諸の莊嚴に於て最も第一たりと。

實に慚愧の服を着たる人は美點である。世に無慚無愧の鐵面皮程見苦しき者はない現代の如き人心浮薄に只虚飾に流れ己が分を顧す。天に慚ぢず、人に愧ぢず。其の精神生活に於ては上に在つて政治を執る者己恣にして人民の意を察せず。經に尊

卑上下貧富貴賤勤苦忽務して各殺毒を懷く。惡氣竊冥にして妄りに事を興さんとて天地に違逆し人心に従はず。内心に毒を懷き表面を装ふて世を瞞着す。皆々然り。是の如きは他人が然りと云ふに非ず、己も亦此の張本人である。然れども其の非なるを自覺するの明もないのである。斯く闇黒の世なればとて爰に始めて大ミオヤの光明なくてはならぬのである。靈光に照されて初めて自己の汚れたる衣の慚愧に耐へざるを感ずるのである。

光明の生活なる己れなりと自覺しても中々に脱ぐこと難きのは業識生得に心に着て居る煩惱の衣である。氣質の肌着である。人と生れ物心覺えて後に見るに聞くにつけて世の塵埃に益々染みていかに汚れたるかもしらす。光明に遇ふて全く己が汚れたるを覺ゆる實に恥しいのである。

彼親鸞上人は我に戒なし。無戒の僧只慚愧を以て戒となすと言はれた。上人は流石は光明中の人である。靈光は自己の内的生活の内容を照破する時はいかに聖人と云ふも如來の前に慚愧だけは感ぜざるはなからん。西人も云へり。實に我は無益の奴世

に除くのぞに如ごとじと。己おのれを見るこゝに至いたつて賢人けんじんと云ふべきである。何人なにびとが肉にくありて眞しんの清淨しやうじやう無垢むこなる精神せいしんあらん。然しかれども光明くわうみやうに照てらされて己おのれが眞實清淨しんじつせいじやうに非あらざるを自覺じかくするを以もつて、清淨せいじやうなる如來にょらいの光明くわうみやうを仰おほぐ、若もし如來にょらいの光明くわうみやうを以もつて衣ころもとせざればいかに如來にょらいの中に生活せいごすることが出来できよう。光ひかりに遇あふ者ものにして眞しんの慚愧ざんき衣えを着きる。慚愧ざんきの衣えはミオヤの賜たまものである。之これを着きればこそミオヤと共に行住坐臥ぎやうじゆうざぶわを共にすることが出来でる。

破やぶれたる袍ほうを着きて恥はぢざる子路しるは精神せいしんに衆人しうじんに對たいして内心疚ないしんやましからざる勇氣ゆうきを以もつて衣えとすればなり。

我等現代われらげんだいは世間概せけんがいして華奢くわしゃに流ながれて内面ないめんの腐敗ふはい甚はなし。光明くわうみやうを得えたる人ひとにして此こ弊風へいふうを矯正けうせいするにあらずんば吾わが同胞どうほうをして餓鬼道がきだうに墮おさしむるの已やむなきに至いたらん願ねがはくは吾同胞わがどうほうよミオヤの光明くわうみやうの中に慚愧ざんきの服ふくを着つけて生活せいごせん。

惡魔

五蘊魔とは色受想行識に關する魔力。身心は魔の巢窟。色蘊は此の肉體なり。諸の物質元素の蘊まる處。いかに斯く肉に魔は宿れるか。否もとより此の肉色も能く肉體の眞面目を着破する時は魔の托する處に非るも此の諸の元素の蘊りなる假和合の姿色に實に凡夫を魅醉せしむる魔力存せり。

嬋媚たる鬢髮、婉轉たる蛾眉、青蓮の眸、紅唇は白齒を含み芙蓉の顔、一たび笑へば百の媚、一々解剖してもとの元素に復する時は十四の元素の娶積せる肉團なれ共、髮は紺青の如く、容は麗かに雲間の月、丹果の唇、白雪の齒、惡魔は如何なる魔術を以てこの元素を加へ集めて、斯くなまめかしき色に巧言令色の術を以て愚夫の春情を蕩かさしむるや。

肉團を覆ふ一重の皮は三軍の帥の魂を奪ひ四大假和合にあやつる魔力に城を傾け國を傾く。されば佛在世の時に吉星長者の姫の魔魅にかゝりて貞潔なる王后を親ら射殺さんとしたる王あり。又彼の英雄アレキサンドルは戦ふ處勝たざるなく向ふ處降

らざるなきも王自身は某姫の明珠の眸に含める魔力に魂を奪はれしに非ずや。楚の項羽の如き豪傑も悪魔があやつる色蘊の色香に捕はれたり。殷の紂王は二十九代の主遂に姐己の色魔に魅せられて殷の六百年を亡すに至れり。又淫聲の凡愚を誘惑して人を無道に墮落せしむる魔力の伏せること已に道果を得たる舍利弗さへも緊那王が彈琴の一曲に計らざりき縑衣の袖を翻へして舞はしめられしと。淨瑠璃なども人の心を酔はしめて墮落せしむることあり。真理の光を離れて迷ふ時は眼にも耳にも鼻口舌身として魔の誘惑に陥らざるなし。

憐れなるかな凡夫。假色の爲にほだされ唯此の罪の伏せる肉の慾を恣にして此の心霊の宮を汚して悪魔の巢窟となす。

唐の玄宗の如き楊家が女の容色殊に麗はしき處に魔力にかゝりてさまでに暴悪ならざりし玄宗も遂に肉の奴隸となり驪山の華清宮に霓裳羽衣の曲を舞はせて宴樂する處はからずも安祿山の反逆起れり。

人の容の美なるもの固より魔なりと云ふには非ず。魔に便りを與へて容易ならしむる性質なり。いかにとなれば異性をして之に惑ひ易からしむる故なり。

妖色自身に於ても自ら其容色に誇り動もすれば色の爲に幸福を獲んとする傾向あるは是不祥なる兆なり。

心光によりて正眼に觀じ來れば容色必すしも不祥なりとは云へず。人の容貌の殊勝なるは過去に於て能く忍耐即ち能く達順の境に對して安忍し瞋恚嫉妬等の情なく柔和貞順の報として衆人に愛敬せらるゝ容色として現するなりと。

又生物進化の理によりて見るも牛物が雌雄淘汰の數千萬代に進化し來りし結果として美に發達せりと。然れば肉體容色の美なるも進化の程度高きに隨ひて美も又優たりと云へば美は美なり。

肉體は心靈を宿す處の宮にして最靈なる聖靈を依する處又如來増上方によりて法身隨緣の能力を顯さんが爲の色身とす。

生理規定の生殖作用の必要より雌雄相愛の情と相愛の相を表せん爲に色相の美として現じたるものなり。

其の目的は生殖にあり。容色の美は手段として假象としての現象なり。然るを凡夫是を覺らず肉の快樂を目的の如くに觀する爲に惡魔が其の弱點をつきとめて遂に己が眷屬とし肉の奴隸たらしめて闇黒の中に墮落せしむ。

如來心光の増上力によりて心靈覺め來れば肉の假相に眩惑せず、心靈によりて他を愛するに至る。

如來の愛より出づる愛はすべて同一の大なる愛が我と彼との間に顯はるゝ愛なれば、相和親愛の情いと濃かなるも、共に清き愛より衝動し共に清き國樂しき園に聖衆の親友の如くして聖旨を相互に勸め共に善知識と成りて眞善美の極に向ひて進むことを得。

受想行識は是人の精神の能力を四分類したるなり。受とは感覺此の感覺に魔が便り

を得るとは此の感覺なるものは人の五官が外界の色聲香味觸の刺戟によりて生起する處の心の作用を云ふ。此感覺なるものは外界と内界との交渉によりて現れ來る心の象なれば動すれば此の間に魔が便りを得て人を惡道に誘惑し人をして遂に五欲の奴隸とし肉慾の餓鬼に陥らしめんとす。たとひ欲界に好色美聲あるも人に是を視聽する感覺なからんかいかなる好色も美聲も敢て感すべきなからん。

人の視覺に映り來る物、色は何ぞや。古代の哲學者たちは人の感覺は能く人を誤たしむと。たとへば針を以て我が皮膚を刺す時は忽ちに痛覺を感ず。然るにこの痛覺は針の方に在りや將た人の皮膚に在りやとならば針にあらずして痛は皮膚の方に感ずるならん。是と同じく外の物色を見るも感覺は外にあらずして己が視覺にあり。若し人のすべての感官なからんか、雷空に響くとも音なく日光世界を照すとも明の感ずるなからん。

そして感覺には對象の物質なくして視ゆることあり、幻術師の幻を現するに忽然

として男女の姿と現れ、人の之に對する視覺は全く物象と同じく異なるなく、また人の肉眼に見へざるも能く人には美人と視ゆるも明鏡には狐狸の姿なるあり。或幻術師が長竿を立て一の可愛き童子を其の竿に登らしむ。衆人は是を視るに全く實際に之を視る。然るに寫眞に之を撮影する時は寫眞影には唯竿のみにして童子の影なしと。又或寫眞師が或る僧の一人の影を撮るに、撮り終つて其の影を見るに僧の側にいかにも恨めしげなる姿をなす婦人の影を現じたり。寫眞師怪しみて其の僧に問ふに、其の僧の曾て蓄へし妾の影なりしと。其僧他の妾を寵愛して先の妾を疎んず、故に先の妾之を恨み遂に自殺せしなりと。肉眼にて是を見ざるも撮影に現れしなりと、又視ゆる幻影は寫眞には現れずと。して見れば人の感覺は魔力に感すべき性能存せり。

人が感覺慾魔の爲に心靈を汚し闇黒に墮し地獄に陥らざるもの稀なり。目の色に耳の聲に鼻の香に舌の味における之に同じ。

斯く人の肉の感覺なるものは斯の如く不完全なるを利用して以て惡魔が誘惑して人

を墮落せしむ。或は妖色の美を呈し或は酥耳の慾よりして蟬妍たる鬢蛾眉の黛に粧をして愚夫の眼に便りして遂に會て偕老同穴の契り深き貞潔なる良妻を厭惡し或は正宗の樽の中に潜伏したる魔は遂に愚夫の舌を誘惑して神經を痲醉せしめて會て平和なる家庭に風波をおこし遂に家を敗る。

また肉的魔は蘭若の修行者の爲には最も恐るべき阿房羅刹の相を現じて畏れしめまた最も可愛の王女と現じて行者の春情を促し、また幻覺の中に種々の天像菩薩像を現す。幻覺錯覺し易き腦を有せるものは固より健全なる精神にあらざれば自ら理性をして感情等を自制する力缺乏するが故に慢心を生じて後錯亂するに至るが故に、如來の増上力を頼むなく専ら自力を怙むが故に擧高して精神を錯亂せしむ。

自己は是罪惡の凡夫なれども、如來の本願によるが故に我らを憐みて勝緣勝境を示し給ふと決心する時は此の魔事の難を免るゝ事を得べし。

次に想蘊魔とは想は想像また感情にも通ずべし。人の感情なるものは肉我の中心点

にして肉を我と執するものは感情なり。肉の幸福を望み快樂を冀ふ中心點は感情なり。宗教生活の中心點も感情なれば如來の慈悲を感じるに感情に融合して全く如來は我がものとなり我如來の中にあると感ずれども、また反對なる魔の爲に最も深く感染するも此の感情にあり。

若し感情上に惡魔のために障られんか、世の罪惡を喜び他人を惱し人を苦しめんとを却つて樂しとなす。

人には同情ありて自他の苦樂を共にするは是正しき心情なり。然るを他を苦しめ人を惱ますを以て己が快樂を感じる如きは是情魔に非ずして何ぞや。其の最も甚しきに至つては殷の紂王が其の愛妃妲己の甘心を求めんが爲に炮烙の刑てふを行ふ。初め南庭に五丈の銅の柱を二本立て上に鐵の繩を張り其の下に炭火を熾んにし罪人に負はしむるに石を以てし繩の上に責め登して是を渡らしむ。罪人氣力疲れて炭火に落ちて焦死す。姐己是を見て大いに興じたりければ後には罪科なき者まで妃が甘心を得んが

爲にこの刑を行ふにいたれり。或は又人の幸福に對し嫉忌を生ずるあり。

感情魔とは一家團樂の幸福をも一度人の感情が魔の爲に侵されんが忽ちに風波を起し昨日の天上の樂園は今日は忽ちに變じて修羅の鬭諍と化し來る。曩に僧老同穴と契りし睦ごとはいまはうちかはり、君子として世に稱せられし良人も一旦情魔に侵さるゝ時は僧老同穴の契り深かりし貞順の婦人の顔をも見るをさへ厭惡して妖魔の爲に惜しむ可き紳士をして肉の奴隸とし情魔の爲に捕虜とせらるるに至る。また世に賢婦と稱せられし貞婦も情魔の爲に乗せらるゝ時は貞潔の志操もいつしか亂れて墮落の淵に沈み貴むべき良心もはしく魔の爲に滅亡せらる。世に情魔てふものなかりせば世人が理想せる地上の天國は何れの里にも又いかなる家庭にも實現せらるべきものを、可惜青年男女も情魔のために侵害せられて往昔青雲の志をして蹉跎たらしめ空しく塵埃の裡に葬り去らるゝもの數ふべからず。

かゝる情魔の難を遁れて人の心情を潔からしむるものは如來の心光増上力なり。

實に此の弱きものに偉大なる力を與へて情魔の流に溺るゝものを救ひ給ふ。吾人の弱き情魔の焰は胸に燃あがんとする時にはたゞ聖きみ名によりて聖きみむねを仰ぎまつりて、**ひきミオヤよ**、我を汚より救ひ給へと祈念するとき一點の光は吾に清き道を示し給ふ。

あゝ危い哉、若し吾人は如來の聖き光の増上力なかりせばいかでか情魔のわなにかりて狐の火に焼かるゝことを免れん。生理の自然なる力かはしらねど何故にこの肉に賦するに情魔に感じ易き性能を以てしたりけん。

何ぞ圖らん、斯る弱點のなかに危難と戦へるこそ勝利の名譽たることを顯はさんが爲なるを。感情には種々の弱點がある、例へば情に己が愛者の惡は惡と感せず、己が憎む人の善を識るの明を翳す。泥んや己が弱點は我愛に昏醉して之を識るの智を眩す。この弱點を機として魔が人の感情に闖入して己が眷屬とし己を恣に快樂の器にせんとす。故に己が肉我の情を恣にして或は憤怒し或は貪戾し嫉忌し舉高と非道を樂し

み人の悲を喜ぶ如きは現に其情魔に侵されしものにて彼はも早や魔の眷屬なるものなり。

人は情魔の巢窟とならんか、遂に情操が魔の配下に基礎をかため其の郷黨隣里に非常なる苦辛慘憺なることあらば彼が感情は非常に喜びを生ず。他人に幸福ある時は己れ愁憂苦惱し人の道德上に人格の高きことを厭惡し、佛陀の聖教を憎惡し、人をして闇黒の獄に入れて苦惱を感じせしむるを己が快として、己れ亦之よりは一層酷しき獄の火に焼かるべきを知らず。

如何に大厦高樓なるも一點の火の爲に焚き盡さるゝと同じく、いかに柔和なる家庭も此の魔の爲には忽ち破壊せらる。ペスト菌の爲にはいかに健康の身體も忽ちに斃さるゝと同じく世に高等なる人格と稱せらるゝ人も一度情魔に侵されんか忽ちに人格は墮落するに至る。

人は全く弱きものなるを自覺し常に如來の心光増上力によらざれば危ふかるべき

を感じ佛光を離れず己が心情の力と仰がば斯かる危難を免れて一家の平和一身の安全も得らるべし。

いかに如來は吾人が心情の増上縁となるかとならば、吾人の心情は我愛の爲に昏醉して如實に判斷するの明なく、端なくも魔の爲に眩惑せらるゝも、若し如來眞理の鏡の前には私なしに如實に判決し愛憎の爲に眩まされず。

たとひ他人に對して己は非をも是として強ひて通さんとするも、神聖なる聖旨の裁判は我に宣告するに汝が非理なるを示す。神聖なる聖旨の前に諍ふべくもあらず。人の感情は永久不變のものに非ず。故に轉變常なき感情に一任せずして永遠變らざる如來心光の増上力を規とすべし。

こゝに一人の紳士あり。其の位地も財産も名望と云ひ人格と云ひ市内に指を折りて教へらるべき好紳士なり。是が家政の内助者たる令夫人は其の器量萬人に勝れ其の容貌の麗しき恰利の質貞順にして能く隨ひ實に此の君子の好配とし其の家庭の暖かなる

こと常磐の春この家庭を去らず。三子二女は學校の成績概して優等ならざるなし。此の家庭の心靈上の幸福はいざ知らず實に世に人間とし此の紳士程に幸福なる家庭は稀なるべしと見聞の人をして羨ましめたり。かゝる幸福に充さるゝも未だ心靈は一點の光なき時は其の間隙を機會とし惡魔はいと麗しき家庭を見事に顛覆せんとす。惡魔謂へらくいかに人格高きと云ふも彼が精神に高等なる宗教なきが故に早晚吾が手に入りて吾等が快樂の料とせん事必定なりと。惡魔は彼が嗜む處の樽中に潜んで彼が肉の中に交り入り而して彼に大なる愉快を感ぜしめて漸々に己が手に入れんとし其の術を施せば漸々に樽を進抗す。後に樽中の愉快にほださたて惡魔は妓樓に彼を誘ふ。肉の奴隸に近づけつゝあり。彼は又やがて情魔の爲に魅せられて妓樓の爲に魂は奪はれて我が家の庭の妻子を顧るの暇なからしめらる。惡魔は幸福なる家の主人公をば己が手に入れしも次に術を施すべきはかの世の貞婦と名に負ふ處の妻にありと、惡魔は頓に妻の胸裡に潜みて夫に對する嫉妬の焰となりて燃え始めぬ。さしも昔の暖かなりし庭

も今はうちかわりて何となう物塵しき閨の門に夫の歸るさ待ちわびるに十二時の時は告げぬ、とても今夜は歸るべきはあらじ、もはや數ふれば三日夜ア、と嫉恨の情魔は胸を焦しつゝ、よしや夫は歸らぬものと決心するも情魔が衝動する嫉みの炎夜は少しも眠らせじ。さしも貞女と呼ばれし妻女も心靈の空隙に乗じて情魔の爲に遂に捕虜となりぬ。人はいかほど肉の幸福なるも心靈にして空隙あらんか必ず魔の爲に其の空隙を伺はれていつか心性をなやまされざるを得ず。

淑女がいつの試験も優等にて及第し、他もゆるし自分も信じて、やがては大臣の令夫人ともなりて世に待遇せらるべき理想をもて未來雲井にのぼる玉の輿を理想せしが、さしも高かりし理想も、目にこそ見えぬ情魔はいつの間にやら浮名の立つか立たぬ程に袴の紐の短かさを感じ父の氏性もしらぬ子の母として貧しき裡屋に苦しき生活を營むに至る。

げに憎むべきは情魔のしわざかな。

行蘊魔

行蘊とは行爲の心理にて即ち意志のことをいふ。意志は人の精神全體の行爲に名づけたるものにして、智力にも感情にも意志は離れぬものである。精神に善に惡また道德不道德などの意向のいかゞによりて人格の高下を定むるものである。

人の意向として意志の向きかた性質が種々に區別が出来て諺にいふ十人十種、各其好む處其性格が同じからざることは面のさまゝなると同轍である。而して意志の地盤が最終の根底たる偉大なる基礎の上に立てるものなれば決して魔のために侵さるゝものではないけれども、無宗教の人の意志は我を基礎としての我意である。また世俗情操とていかにも意志の原動と成るべき人の情操が卑賤である野俗である。肉我より衝動する意思にてあれば自然其理想と云ひ希望と云ひ卑劣なること免れず。我また我意が世俗の卑劣なる情操よりいづる意志は世界動機とて浮世の義理などのために動かされて世の爲に搖ぎやすし。かゝる弱所に乘じて行魔が人の意志に托してついに惡魔の

ために誘惑せられ捕虜にいたるの止むを得ざるにいたりて、人の意志の方向を誤らしめ人格を墮落しつひには三惡道に落いるにいたる。

恚る人に對して意魔の障を降伏して其心靈を復活して、凡夫を轉じて聖者たらしむるものは如來の降魔成道の増上力なり。人己が我意の薄弱なるを捨て如來の無上の力あるを信じ之に一任し、我意を聖旨に歸服する時は意志の最根底たる心靈開展し如來の神聖正義なる聖旨の司導の下に行動し意志をして益々至善に向上せしめて靈化し給ふ。人の意志なるものはいかにして薄弱なるかまたいかにして世魔のために便を得られて人生を過らしむるであらうとなれば、肉我の意志なるものはつまり、肉慾我慾の肉の幸福を主義とし我意は唯肉の幸福を最上の目的としあれば其理想とする處其希望する處要するに肉我の満足を求むるに過ぎず。意志を肉の奴隸とし畢生肉の犠牲となるを自ら甘んず。恚の情操と云ひ意向といひ人生の墮落を司どる惡魔のために誘惑せらるゝのいかに容易なる性能なるぞ。

高等なる宗教心即ち如來の聖旨は人の意志を靈化し益々向上し無上菩提を得せしめ人の意志を聖者たらしむるにあり。

聖者となることは肉我の幸福を求めんとするには甚だ利益なるなれば殊に靈我即ち聖にして勝を得むか肉我はつねに靈我に服従し毫しも自分勝手の欲望に満足をゆるさざるなり。

意志に對して如來は眞理の神聖なる光明を以つて人の意志を靈化し正しき聖き道の中なによりき道を歩ましめ限りなき生命をして無上の幸福を與ふ。

肉我の欲の意志は其根底微弱なるが故に、縁の方に働き易く故に八風の爲に搖がさる。憊る肉の弱き意志の虛に乗じて魔は侵入して意志を變じ性格を轉じて人格を墮落せしむ。

人の好意なる同情同愛、人の意志を高尙にする理想又遠大なる希望によりて人格を高等にする自利利他の菩提心を破壊して人格墮落せしむるものは魔なり。肉は惡魔の

誘惑に感じ易し。

世に八風てふ魔氣あり弱き意志を搖して輕毛の如くに左右す。八風とは何ぞや。利衰譏譽謗稱苦樂之を八風と名づく利とは肉我意の欲望に満足を與ふる力にて肉に幸福を與ふる器金錢及びすべての財人を滋養する處の財物を得ることにして利のためには義を忘れ佗を顧みず、爲に道德より墮落するものなり。

利てふ風が人の貪欲の火を煽動するときは欲火熾にして竟にとまる處なからしめんとす。利の爲に思の動かざるを聖と云ふ。之が爲に動かさるゝを凡夫と名づく。凡そ世に利欲なるものほど人の心を染汚ならしむるものはあらじ。貪欲に染まざるものは汚中の蓮の如くに潔し。佛陀の身相好光明端正なるは利の爲に汚されず利の爲に動かざる麗しき相を示されたるなり。

利風は人の身心を繫縛し身心を使役す。即ち經に心の爲に走使せられて安き時あることなしと。

利に心の動かざるを剛者と云ふ。論語に孔子が我未だ剛者を見ずと。時に門人が曰く申振は剛者なるべしと。孔子云く振は慾ありなんぞ剛をえんと。いかに勇者も利の爲に動かさるべきものはまことの勇に非ず意志微弱なるものなり。

孔子易を讀んで損益の卦に至つて喟然として嘆す。子貢問ふ夫子何の爲に嘆すと。孔子答ふ夫自ら損するものは益す、自から益するものは缺く。吾是を以て嘆すと。此卦を見れば自ら貪慾を慎み功なくして祿を得、徳薄くして位貴き、また僥倖の財利分に過たる名譽、ここには必ず禍の伏する處、此稱譽はこれ毀謗の兆候なり。

行蘊として衝動し來る伏せるサタンは己が分限を忘れて利欲名譽の衝動として己が分限を忘れ節度を超えて謙遜を失はしめ眞面目を缺き己れ一躍して顯要の倚子に登り登龍門の譽をえんとして遂に眞面目なる勉力を墮らしむ。

有爲なる青年宿昔青雲の志を蹉跎たらしむ古往今來行魔の爲に意志を侵され天職の資性を唐らに肉我の奴隸となし、高尚なる人格たるべかりしものをして空しく名利の

奴となりて聖道を誤らしめしものいくばくぞや數ふべからざらん。

一たび自己の意志の微弱にして無力なる八魔のために障られて自から菩提の成すべからざるを自覺し一に意を歸して如來に歸命する時、靈性的の生活となり常に如來の司導の下に行動し光に靈化せらるる時は弱者に偉大なる力を與へ忍び難きを能く忍び堪えがたきに堪え易からしむ。光に靈化せられたる靈我が自己を支配する時に魔もいかにとすること能はず。

四念處に心は無常なりと觀せよと實に吾人が肉我の心意は決して常然として不動なるものにあらで、まことに頼り難き者にぞ。朝に勤王の忠臣は夕には朝敵の名を買ふに至り、昨日は孝女として稱せられし女にも今日は仇し浮名の立つ身と變る。肉我はまことに頼み難し。

サタンはいかに剛かりし意志のところにも靈の光のなき處にはサタンの力の侵入を妨げず。一切の人々を擧げて悉く聖賢たるを得ざるは意志を侵すべきサタンの力に依

てなり。

サタンの怪しき毒が人の心意に薰染せんか、行蘊魔より衝動する心意の活動は念々サタンは胸臆に彷徨し曩に青雲の志は忽に轉じて肉慾の奴隸となり賢人君子もサタンの爲について小人凡夫に墮落す。

サタンに感じたる意志の活動は燃えるが如くに人の意に衝動す。

心光の増上縁によりて人の行蘊之に感せんか忽ちに轉じて心意の衝動は靈なる聖寵の火を點じたる我が意志の燈となりぬ。

聖光の點じたる意思を靈聖とは呼ぬ。聖火に燃つゝある心念を靈的衝動と名づく。之心光によりて靈は復活し聖子となりてよりは日夜八億四千念々は自らつねに聖き火をして燃えつゝ、この光によりて吾人が靈はつねに燃ゆ。

識蘊魔

識蘊とは心理の智力なり。本智力なるものは聖寵を被むるにもまた聖き道に進みゆ

くべきにも正智は最も必要なるものなり。智力其ものは決して靈を殺すサタンにはあらず。然れども肉我は智力を利用して己慾を逞うせんとする其虚に乗じてサタンは智力に加はりて智力を悪用して正道を妨げ靈の生活を害せんとす。

ソクラテスが云ふ如く、知は徳なり人全く眞知缺くるが故に不徳を行ふと。また彼は、我は自己の無知を識ると。全く己が無知を自覺する人は氏の如く、また孔子が知らざるを知らずとせよと是知るなりと。斯る眞如の光ある處は惡魔もいかんともすること能はざるべし。

しかれども古の人は己が爲にす。今の人は人の爲にす。學問に於ても知識に於ても全く己を明にし、自己の我を自覺せんとの知識にはあらずして佗の爲にする知識教育なり。此の中の人は皆己を見るの明なく己を識るの智なきが故に世は悉く盲者なりと云ふやうな人には、惡魔は其虚に乗じて其心内に托して其人を狂ならしむ。然らざれば憍慢ならしむ。

知識が惡魔の爲に侵さるゝ時は傲慢偏屈自尊にして圓滿に人格を發展すること能はす。唯己のみ獨り尊大なりとして世を輕侮し衆人を見ることが土芥の如し。佛在世に一の外道學者あり、己が智を恃み知識誇り白晝に燈を把りて歩行す。人其故を問へば則ち云ふ我時に燈を把るは佗にあらず、世は悉く闇黑なり我獨り能く智慧の光を以て世を照すと。時に佛陀は彼が愚なるを救はん爲に或商店の店員と化して彼が自己の無智を自覺せんが爲に天文地理等すべて及び内明につきての秘要を詰問せしに之に答ふること能はず。竟に自己の無知を覺りて舉高の角を折つて佛陀に歸してつひに羅漢果を得たりと。ソクラテースは常に學生が己が知識を持て舉高して節を失ひ身の分を過り有爲の青年をして空しく識魔の爲に過まりて生を誤るものを救ふこと急なりき。ポウルゼンの倫理に人は高等の教育を受けても天性其性質適せざる教育と、其地位境遇の爲に運用できぬ知識は全く價值なしと己が能力已上の知識は人をして益愚ならしむ唯知識のみを重んじ天賦の能力性質に適應せざる知識の結果不消化知識を以て判斷を

攪亂し抑壓す。ハックスレーが人の痴愚は生れながらのものにあらずして十中八九は父母教師が其自然の知的欲望を抑壓し常に無味乾燥なるのみにあらず、不消化なる糊口に關する人間的欲望を絶えず生ぜしめんとするに由ると。斯る識魔は人の天性を攝すると共に生じ來る傲慢等によりて過度の教育は獨り知性を鈍くするばかりでなくまた感情を鈍くす。

人の教育と境遇との間に衝突起り職業及び地位が從來受け來れる教育を利用せしめざる時は知識は彼を幸福にせざるなり。彼は自から不相應の要求を起して己が職業を快とせず、己が外圍に對して心地安からざるものとす。不當の教育ありて農事に從事するものゝ如き之が適例なり。徒らに世人には憚かられ輕せられ爲に己世間に對して心平ならず、自己の地位をもて己に適せざるものとす。斯の如き今日其幾何あるを知らず、男子と云はず女子と云はず教育あるが爲に己が屬する階級より放逐せらるゝもの世間至る處に有るなり。彼等は己が自活の要求は其品位を墮すものとして爲に不

快くわいを感かんず。

教育けいよくの進すすむに隨したがひて受うけたる教育けいよくに個人こじん及び社會しゃくわい的てき關係かんけいに適合てきごふせずして人ひとをして不幸ふかうに陥おちらしむるもの毫すこしも怪あやしむに足たらず。教育けいよくある婦人ふじん、家庭かていに風波ふうはを起おこしたりしが近來きんらい大學だいがくを出いでたる者もの往々わうわう其受そのうけたる教育けいよくの爲ために糊口ここうに苦くるむ。是これ高等かうとうなる知識ちしきを得うることを學まなびて衣食いしょくを得うる方法はうほうを學まなぶに忽ゆるがせにせるにより彼等かれらは斯損このそんがい害がいを償つぐなはんとし力ちからと欲望よくばうとを有いうするも其教育そのけいよくは之これを實現じつげんするを許ゆるさず。何を以もつて之これを許容きようようせざるか。曰いはく衣食いしょくの爲ために手足てあしを勞らうするは教育けいよくあるものゝ名譽めいよを失墜しつたいする慮おそれありとすればなり。知識ちしきの爲ために識魔しきまの爲ために襲おそはれ來きたつて知識ちしきは諸方面しよほうめんに於おいて向上かうじやうの妨害ぼうがいをなし靈格れいぐくた
らざらしむ。若もし如來にょらいの心光しんくわうに人ひとの知力ちりきを照てらす時は從來じゆらい識しきを癡痺ちひせしめた魔まの中なかより覺醒かくせいし、すべての知識ちしきは眞理しんりを覺さとう得うる時は人ひとの智ちは神かみの前まへに愚ぐなるをさとる。

肉にくの生せい活くわつ上じやうに於おいて尙斯なほかくの如ごときの知識ちしき魔まは人ひとを誤あやまらしむ増まして況いけんや心靈しんれいの二ふたに於おいてをや。故ゆゑに人如來ひとにょらい心光しんくわうによりて全まったく己おのれが無知むちを自覺じかくし唯一ゆゑに如來にょらいに歸きし、克己こくぎ自剋じこく自

策して惡徳の源なる傲慢の闇をさり、一に如來の心光によりて覺醒する時は無明の眠さめて人生の眞理をさと、益聖道に向上すべし、實れども虚しきが如く苟しくも智者の振舞をせず、實に己は是無知無力なり、但如來の心光によらずしていかでか聖道に進むことを得ん。肉我は無知無力なるを自覺したる我に識魔もいかんともするのと能はず。故に聖法然は愚痴に還りて念佛すべきをすゝめ、たとへ一代の法をよくよく學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無知の輩に同うして智者の振舞をせずしてただ一向に念佛すべきことを教ふ。

心光加はる處に眞知生ず。眞知は智者の振舞をなす如き似而非智にあらず。大賢は愚なるが如し。賢哉同哉同は終日言はず愚なるが如しと。外面に智識を装ふもの人の前の智は如來の前に愚なり。心光の中に益々進んで正智をえよ。ト翁がイワンの話にイワンの愚には惡魔もいかんともすること能はず。從弟の二人は私の智と勇とをたのみにして己を偉大のものと誇大擧高するが故に魔はその便を得て彼等を見るごとに

墮落せしめたるの譚よく識魔の相を畫けるではないか。

毀譽八風の難に碇泊の増上縁

人の意志なるものは甚だ薄弱なり。一時の勇氣はいかばかり猛くはやるとも永久に意志の一定して持續する事は甚だ難し。孔子は白刃も履むべく爵祿をも辭すべきも中庸をば能くすべからずと云はれし如く、志は實に怙みがたしとするも君子の君子たるは全く一時の感情的勇氣にあらすして永久に常なる意志の靈たる處に於てす。すべての人をして自ら聖人と等しく中庸の意志として道德的行爲に偉大なる勝縁の力を與ふるものは如來の心光の増上縁による。世に平凡の意志をして薄弱ならしむるもの、人の心意を搖動するの動機甚だ多し中に就て最も人心を動かす機會たるものに八あり之を八風といふ。薄弱なる凡愚此八風のために意志をして鴻毛の如く左右せらる。八風とは何ぞや。毀譽謗稱苦樂利衰是なり。人の意志が天然の世界動機世俗情操の基礎の上に安立するものはいかにすとも斯八風のために動搖せられざることを免がれざる

なり。人の天然意志は肉我を根として名と利との爲に執着し、肉我は名利の二を以て生命とす。實なくも名譽を望み、勞せずして利あらん事を貪り、實にその淺劣なる情操實に憐むべし。名と利との爲に目のなき卑賤家寔に傷むべし。彼等は斯二の爲に精神生命をまで忘れて、ついに心靈をして自ら獄火に葬り去らんとするをいとはす。

彼等は心靈により眞の如來の前に靈によるの名譽と靈の大利あるを知らず、唯眼前の仇し名利の爲に奴隸となることをいとはす。心光の増上縁を被らざるものゝ比々然らざるなし。

人は識譽褒貶のために己が意志を枉げても譏を避け譽を得んことを望む。若し人如來の眞理の光明を標準とする燈臺なからんか、人の精神生活の過程は大洋を航する航路に等しく、航路誤り易し、八風はいつの間にか航をめぐらして方向を轉せしむ。人の意向なるも平凡の人の意向なるものは苦を避けて樂に就ん事を求め、道を枉げ徳を破りても之に就かん事をのぞむ。また利の爲には佗の利をも己に、害に對する向は

他の利をも己に向はんことを欲し、斯八風は人の感情に激しき波浪を起し情操を動かして終に意向を俗情の動機に傾けんことを免れず而して意志が主我を根底とせばいかすとも名譽と利欲の爲に動かさるゝことを遁るよしなし。ここに到らばいかに知識たるも世の豪傑たるも全く主我を中心とする人には八風のために動ぜざる能はず。天然の我意と世界動機とは野卑なる情操にて之六道流轉の凡夫なり。之を超越して肉の我を超て如來の靈化の増上緣によりて一たび如來光明界裡の人となり。我意目的の迷妄なるを認め、如來の終局目的に隨順して益々向上して眞善美の極致なる靈界の彼岸に向つて行進するの意志に眞理の終局に勇進して自ら之を以て眞理なりと信認する時は世俗の譏譽褒貶も敢て意に介するにたらず。

如來は神聖にして眞理の光なり。斯光明を標準とせずして極樂に到らんとするも決して能ふべきにあらず、闇夜には燈臺ありて航路を過たざらしむると同じく吾人は如來の光明を増上緣として終局の天國に入る。自から思惟せよ。吾人は是如來の光明

によりて天國の靈港に入るの航路たる生涯たり。世の八風のため意志を挫げ目的を誤たばいかでか眞理の極樂に入ることを得べきぞ。たとへ千萬人悉く非難するとも我意志は眞理の光明を標準として勇猛に往進して敢へて躊躇せず。人は港の燈臺を標準とせずして我意に隨はば、やがて必ず航路を誤り暗礁の憂なきを得ず。人生の航路知來の終局目的即ち天國に入べき標準たる如來光明の増上緣によらざれば、人々悉く我意自分勝手に、各自の目的を標準とせば闇黒の生活にして即ち三惡四趣の街にさまよふなるべし。

若し人八風のために唯我慾肉慾を恣にして、邪見惡逆の方向に進まば性格つひに奈落の底に沈むの悲あらん。私慾我慾の習慣は人をして餓鬼の業を成せしめ愚痴癡惡なると憍慢は人を修羅道に墮せしむ。